



先週の十一月十五日は「七五三」でした。七五三と言われるようになったのは、江戸時代の後半の頃のようにです。それまでは三歳の時に行く髪置（かみおき）、五歳の袴着（はかまぎ）、七歳の帯解（おびとき）という、それぞれ別の儀式がありました。

その三つの儀式と、江戸時代の三代將軍、徳川家光の四男、徳松（後の五代將軍綱吉となる人です。この当時、体が弱かったようです。）の健康を祈って、五歳の祝いをした日が一六五〇年の十一月十五日。これらが合体して、十一月十五日に三つの儀式を一緒に行うようになったようです。ですから、江戸時代の中期までは七五三と呼ばず、「髪置袴着帯解の祝い」または「子どもの祝い」と呼んでいたようです。

髪置は、三歳の男女が頭髮をのびし始める儀式。この当時、生まれてから三歳ころまでは、髪をそるのが一般的でした。髪置の時には白い綿を頭の上に乗せて、白髪頭になるまで長生きするようにと祈ったようです。

袴着は、五歳の男児が初めて袴をはく儀式。冠をつけて「ある物」の上に乗って、縁起がよいという左足から袴をはきます。

さて、ある物とは何でしょう。これ、（実物を提示）そう、碁盤です。「人生の勝負の

場」と見立てた碁盤に乗り、四方を好み、四方の敵に勝つようにと願ったようです。

ここで大幅に横道にそれます。横道にそれたくないという人は、聞き流してください。

この碁盤の足を見てください。クチナシという植物の実をかたどっていると言われていきます。クチナシという植物は、六・七月頃、甘く香りの白い花を咲かせる植物で、実の写真がこちら。（クチナシの実の写真提示）

クチナシの実、この写真のように実がいかに口は閉じたまま。開く口が無いというので、クチナシと呼ばれるようになったとか、実の先端が鳥のくちばしや梨にも似ているというので、クチナシだとか、色々な説があります。

そのクチナシ、なんで碁盤や将棋盤の足になつているかというと、碁や将棋の世界は真剣勝負。周りの人が、ここに打てとか、そりや違ふとか、口出しは無用。口出し無し↓クチナシということで、クチナシのデザインなのだそうです。それから碁盤の裏、ここに、へこみがありますね。これは勝負に口を出した人の首を切つて、置くためのもので、「血だまり」と呼ばれることもあるそうです。本当は、「音受け」といって、石や駒を打った時の響きをよくするためと、盤にひびやゆがみが出るのを防ぐためにあるようです。以上が碁盤や将棋盤にまつわる怖い伝説。恐ろ

しいので、話を元に戻しましょう。

帯解は、七歳の女兒の着物についている付けひもと取り、大人の帯を締める儀式。大人の女性への第一歩という訳です。

このように、親御さんたちが子どもたちの健康と成長を願う気持ちは、これまでも、これから、ずっと変わりが無いのでしようね。三度の食事ができる。毎日暖かな布団で寝られる。学校へ通える。こんなの「当たり前」と、思っている人はいませんか。

親御さんたちが、君たちの健康と心や体の成長のために祈り続け、どれほど骨を折ってくださいているのか、気がつく感性が欲しいですね。「当たり前」ではなく、実は「有難い」ありそうにない」ことなのです。

気がつく感性のある人は立派です。でも、さらに立派な人は、それを行動に移せる人です。明後日は勤労感謝の日。自分の生活が成り立っているのは、どこかで働いてくださっているたくさんのおかげです。身近過ぎ、逆に見えづらくなっている家族の有難さに気がついたら、散らかった自分の机の上や部屋を片付けてみる。お風呂掃除の手伝いをしてみるなど、チャレンジしてみたらいかがでしょう。立教小学校の四目標のひとつ「すべてに感謝できる子ども」とは、「当たり前」を「有難い」と気づける感性を持ち、その感謝を行動に移せる子どもたちのことだと思っています。（立教小学校校長 田代 正行）